福岡教育大学紀要，第72号，第４分冊，39－53（2023）

今，地域の公立幼稚園の存在意義を問う
―福岡県Ａ幼稚園を通して―

Jetzt die Daseinsberechtigung öffentlicher Kindergärten in der Region hinterfragen
― am Beispiel des A-Kindergartens in der Präfektur Fukuoka ―

船　越　美　穂

Miho FUNAKOSHI
学校教育研究ユニット

（令和４年９月29日受付，令和４年12月20日受理）

Ⅰ．問題の所在と研究の目的

フリードリヒ・フレーベル（Friedrich Fröbel 1782-1852）が1840年ドイツのバート・ブランケンブルクに世界で初めての幼稚園(Kindergarten）を創設して182年になった。フレーベルの幼稚園創設から36年後の1876（明治9）年に，東京女子師範学校附属幼稚園（現在のお茶の水女子大学附属幼稚園）が設置された。幼稚園とは本来子どもたちの花園という意味を内包しているが，フレーベルの幼稚園が既にプロイセン政府による幼稚園禁止令（1851年）によって閉鎖に追い込まれたように，大なり小なり時の政治や社会状況の影響をまぬがれない運命を背負っている。ところで日本では幼稚園草創期から明治半ばまでは公立幼稚園が主流であった。1899（明治32）年には文部省令「幼稚園保育及設備規程」が制定され，幼稚園の教育制度上の位置付けが一応明確になった。1900（明治33）年には幼稚園を小学校に併設することができることが明記され，幼稚園の普及が促進された。このような中で，明治30年代から私立幼稚園が公立幼稚園よりも多く設置されるようになった[1]。これは義務教育年限が4年から6年に延長されたことによって，市町村は義務教育に要する費用の負担が大きくなり，幼稚園に対して財政的に余裕がなくなったことが一つの原因であったと言われている[2]。21世紀に入ってからは国の民営化政策によって，公立幼稚園の統廃合，民営化が進んだ。さらに昨今の幼児教育無償化は，この傾向に拍車をかけている。

公立幼稚園に関する先行研究として，藤井，相良，梨子，石毛の研究（2009）がある[3]。当該研究では，全国の地方公共団体ホームページに掲載されている公立幼稚園の在り方に言及している答申・報告書等を収集し，類型化を行っている。研究によると，現状維持タイプでは，公立幼稚園を公教育の基盤として位置づけ，そこに存在理由を看守していることが共通している。従って，多少の就園率の低さや財政状況の厳しさがあっても，可能な限り公立幼稚園体制を保つことが選択されているという。統廃合タイプの報告書では，公立幼稚園の独自の新たな役割として，研究実践やすべての子育て家庭に開かれた場になることを挙げ，ここに存在理由を見出しているという。機能転換タイプでは幼児教育センターに転換するケースや，幼保一元化・認定こども園化に転換するケースが紹介されている。最後に民営化タイプでは，民営化を検討して実施しないタイプ，民営化を検討して実施するタイプ，民営化を検討しつつも実施を保留にしているタイプに分類して事例を紹介している。最後に公立幼稚園の存廃を分ける論点として，以下の５点を挙げている。①私立幼稚園の補完として公立幼稚園を捉えると，私立があるから公立はいらないという論の展開になる。②公立保育所に対する公立幼稚園の独自性が認め

られない場合，保育所があればよいという展開になる。③私立にはない公立幼稚園のサービスがあれば，存続が正当化される。④公立幼稚園の教育の質に対して信頼が高い場合，存続が認められうる。⑤市町村行政のスタンスによって公立幼稚園の意義が認められる。

藤井，広瀬，伊藤らは2009年の日本教育制度学会第16回研究大会の課題別セッションで公立幼稚園の存在意義について論議している[4]。その中で注目すべきは，公立幼稚園を公共性の観点で分析していることである。子どもの最善の利益，ウェルビーイング，権利保障の観点からすれば，幼児教育を受ける基本的な権利，機会，ニーズは公の責任において行財政的条件整備が行われなくてはならない。広瀬によると，管理運営面において，私企業的な費用対効果分析による圧力・不安から解放され，保育ニーズ本位の援助・指導が可能な制度を担保できるのが公立幼稚園であるとしている[5]。また，園で働く保育者が安定した身分，雇用とバランスの取れた年齢構成と給与体系が保証されていることも，幼児教育サービスの質の高さを保障するものであるとしている[6]。前述したどちらの先行研究においても，共通しているのは，「公立幼稚園は『公立』であることの存在理由をどのように説明できるのか」を問うことであった。

公立幼稚園に関する研究は，2009年の上記の研究の後は重点的に取り組まれたものを見出すことができなかった。とりわけ公立幼稚園の保育実践の内実に迫るものはこれまでのところ見出すことができない。私立園は様々な特徴的な保育を打ち出すことが多いのに対して，一般的に公立幼稚園は「幼稚園教育要領」に忠実に準拠した実践を行っている。公立幼稚園の「公立」であることの存在理由を問う際，保育実践の内実とその質を明らかにすることは重要な意味を持つ。前述した先行研究においても，公立幼稚園の存廃を分ける論点として，教育の質に対して信頼が高い場合，存続が認められうると述べられている。

本稿では，福岡県のある公立幼稚園（以下，A幼稚園とする）の日常の保育実践，保育者インタビュー，保護者インタビュー，及び保護者アンケートの分析を通して，A幼稚園の保育の特徴，及び保護者による評価や思いを明らかにする。以上の結果を踏まえて，A幼稚園の公立としての存在意義とこれからの課題について究明することが本稿の目的である。

なお，本研究で保育実践及び保育者インタビューの文字データを使用することについては，園長と保育者に研究内容や倫理的配慮を説明し，書面での同意を得た。保護者インタビューの対象者へは事前に園長を通して協力を依頼し承諾を得，さらにインタビュー前に筆者によって倫理的配慮について説明を行った。保護者アンケートについては，研究内容等の説明が記載されたアンケート用紙を配布し，匿名で回答を求めた。また，論文記述の際は，内容が損なわれない範囲で，園やインタビュー対象者が特定されないよう配慮した。

Ⅱ．A幼稚園の沿革と当時の幼児教育状況

A幼稚園は1954（昭和29）年10月，私立A幼稚園として現在のB小学校のある場所で小学校の教室を借りて創設された。4，5歳児混合の1クラスだった。A幼稚園誕生にあたって，少し当時の日本の幼児教育の状況を確認しておかねばならない。

日本は，1951（昭和26）年9月にサンフランシスコ対日講和条約に調印して，独立国として再出発した。幼児教育においては，被占領時代の教育政策を見直して，日本独自の基準を作ろうとする機運が高まった。さらに戦後の出生児の激増，核家族化の傾向，社会における幼児教育に対する認識の高まり，国民生活の向上等によって，幼稚園入園の希望が急激に増加した[7]。文部省は1951（昭和26）年2月，「幼稚園に入園を希望する幼児の取扱いについて」を各都道府県の教育委員会及び知事に対して出し，当面は小学校入学前一年間の幼稚園教育の機会を与えるため，地方の実情に応じて二部保育や空き施設の利用などを配慮するように指導を依頼した[8]。しかし，希望する幼児を全員入園させることは容易ではなく，当時入園希望者のうち入園できたものは46.5%であったと記録されている。しかも入園希望を叶えるため，学級の幼児数を増加したり，小学校等の施設を借りて学級数を増やしたり，日曜日等に幼児を集めて特別に指導するといった措置を講じていたという。1948（昭和23）年度の幼稚園の普及状況は，幼稚園数1,529園，在園児数およそ20万名，1947（昭和22）年度の5歳児就園率は7.3%であったのが[9]，1952（昭和27）年度には幼稚園数2,874園，在園児数は約37万名余りとなって，1951（昭和26）年度の5歳児の就園率は12.1%となった[10]。そして，1956（昭和31）年度には幼稚園数6,141園，在園児数はおよそ65万名，1955（昭和30）年度の5歳児の就園率は

21.8% となった[11]。1956（昭和 31）年には「幼稚園教育要領」が刊行されて，幼稚園の教育内容の国家的基準が成立した。このような状況の中で，A 幼稚園は地域に求められて誕生したことが推察される。

1966（昭和 41）年 4 月に私立 A 幼稚園は町立 A 幼稚園となった。A 幼稚園は公立幼稚園としてスタートしたのである。1970（昭和 45）年 4 月 A 幼稚園は，A 小学校の移転にともって現在の場所に移った。この時期は日本のいわゆる第二次ベビーブームに当たっており，加えて高度経済成長期であった。A 幼稚園は当時開発された団地の真ん中に立地していたため，地域の幼稚園として大きな役割を担っていたことが推察される。1971（昭和 46）年 4 月，A 幼稚園は園児増加によって，校庭に仮設園舎を建て，2 年保育各 2 クラス，4 学級となった。当時は文部省によって 1964（昭和 39）年度から第一次「幼稚園教育振興計画」が策定推進され，幼稚園の計画的整備が図られた時期であった。1971（昭和 46）年 8 月には，中央教育審議会の答申に従って，「幼稚園教育振興計画要項」（第二次計画）が策定され，今後の幼稚園教育の進行についての基本方針が定められた[12]。この計画では，幼稚園に入園を希望するすべての 4 歳児及び 5 歳児を就園できるようにすることを目標として幼稚園の計画的整備を図ることが示された[13]。1972（昭和 47）年 4 月，A 幼稚園は現在地に新園舎が建設されて，1 年保育 4 学級となった。この時期，2 年保育が 1 年保育となった理由について，幼稚園の沿革には記載されていないが，当時の状況を鑑みると，小学校入学前の 5 歳児就園のニーズが極めて高かったことが推察される。

1973（昭和 48）年 11 月に A 幼稚園は福岡地区国公立幼稚園研究大会を行った。A 幼稚園は教育と共に研究を役割として担うことになった。1981（昭和 56）年 4 月には園児減少によって 3 学級となり，1983（昭和 58）年 4 月に各学年 2 クラスの 4 学級，2 年保育が再開した。園児数の変化については，子どもたちをめぐる社会環境の変容が背景になっているだろう。当時は核家族化と少子化が進行し，早期知能開発など特徴ある保育を打ち出す私立幼稚園の存在も目立つようになった。女性の社会参加が促進され，親の労働保障が喫緊の課題にもなった。A 幼稚園の園児数の変化はこのような社会状況によって大きく影響を受けていることが推察される。ところで A 幼稚園は創設以来，小学校校長が園長を兼任していた。1990（平成 2）年には A 幼稚園に専任園長が置かれることになった。同年，7 月及び 2000（平成 12）年 11 月には，国公立幼稚園指定の研究会を開催した。その後も 2008（平成 20）年 10 月には福岡県国公立幼稚園教育研究大会を開催，2013（平成 25）年 11 月九州国公立幼稚園研究大会福岡大会の公開保育を行った。そして，2017（平成 29）年 4 月から同じ市にあったもう一つの公立幼稚園の閉園に伴って，市で唯一の公立幼稚園として現在に至っている。

Ⅲ．A 幼稚園の概要

A 幼稚園は 2 年保育で，定員は年中児（4 歳児）60 名（2 学級），年長児（5 歳児）60 名（2 学級），合計 120 名定員である。2022 年 4 月 1 日現在において，年中児 16 名（1 学級）と年長児 19 名（1 学級）で，合計 35 名の幼児が在籍している。現在の定員数は 2017 年の公立幼稚園統廃合に伴って定められたもので，合併以前は 1 クラス 25 名定員であった。

職員構成は，園長，主任，保育支援コーディネーター，年中児担任，年長児担任，及び非常勤教諭である。園長については，これまで小学校校長退職者が勤めてきたが，2022 年 4 月から保育者として A 幼稚園で勤務してきた前主任が就任した。

保育時間は 4 歳児 8 時 30 分から 14 時，5 歳児 8 時 30 分から 14 時 15 分となっている。給食については，パン給食（パンと牛乳）が週 2 回（火・金）用意されるが，他の日は弁当持参である。通園バスはなく，預かり保育は行っていない。

Ⅳ．A 幼稚園の一日

筆者は 2020 年度 A 幼稚園でフィールドワークを行った。コロナ禍の中，地域の公立幼稚園の保育の実際を知ることの意味は大きいと考えたからだった。ここでは，筆者が収集した保育実践をもとに，A 幼稚園の一日を概観することにしよう。

(1) 登園

A 幼稚園では，送り迎えは保護者の責任で行う。登園時，保護者は子どもたちを幼稚園の坂道の下で送り出すことになっている。そして，園長が坂道の下に立って子どもたち一人一人を迎える。筆者は 2020 年 7 月 15 日（水）8 時 30 分から 9 時に登園の様子を観察した。

当時の園長の I 先生は子どもたちを出迎える

際，一人一人とげんこつでタッチをした。コロナ禍の中でもできるスキンシップであった。これがA幼稚園の恒例の朝のひとときである。保護者の同伴なしで園の門に入るのは，付近に駐車場スペースがないことが一因である。しかし，I先生はこのことを建設的に捉えて，「坂道を一人で上がることが大切」であると語った。入園当初，慣れるまでは保護者に園内まで付いてきてもらうが，原則，送りは園の前（坂道の下）まででいいと説明会の時に話す。園長によれば，自力で歩いて行くことによって自立を促し，小学校への接続にもつながるという。小学校では，子どもたちは友達を誘って登校する。A幼稚園で毎日，坂道で友達を待ったりすることは，小学校の登校の縮小版という意味を持っている。しかし，当時5人の子どもたちは，保護者が一緒に園内まで付き添わねばならなかった。その中には年長児もいて，母親と離れることを不安がった。その場合は，例外として車で園内まで入ってきてもらっているという。このことについては，コロナ禍によって新学期のスタートが遅れ，進級した5歳児も不安な気持ちを抱えていたことが原因として考えられる。当該幼児たちは，保育者の支援と友達とのつながりの中で，次第に自分で幼稚園の門に入れるようになっていったことを，筆者はその後観察することができた。

I先生は小学校の校長時代，毎日，校門の前で児童を迎えたそうだ。下校時は，一番遠方の児童と一緒に帰って，子どもの話を聞いたそうだ。一緒に帰ると，いろんな話をしてくれて，子どものことがよく分かると話された。校長退職後は，教育委員会で3年間勤め，当時，A幼稚園の園長として2年目だった。朝の迎え入れの時に，例えば，「挨拶をする子，しない子」，「元気がなさそうだ」，「昨日まで友達と一緒に登園していたのに，今日は一緒ではない」など気づいたことを保育者に伝えるそうだ。自分は幼児教育の専門家ではないので，保育者へのサポートはこれくらいしかできないと話された。

子どもたちは保育室のテラスで担任に迎え入れられ，教室で園生活の準備をする。

(2) 朝の集まり

9時にクラスで朝の集まりがある。全員で歌を歌って，出欠確認が行われる。本日のリーダーは前に出て，長年使われてきたフェルト製のリーダーバッチをつける。その後，子どもたちは飼育，栽培，掃除などの当番活動を行う。2020年7月20日（月）9時から年長児ゆり組の朝の集まりを観察した。

9時ちょうどに朝の会は始まった。T先生が，電子ピアノを弾き出すと，みんな立って，「夏のうた」を元気に歌った。歌が始まると，隣の年中児さくら組の子どもたち数名が廊下から興味津々に覗き見している。すると，ある男児が「さくら組も集まりだから」と言って帰るように，廊下まで行って伝えた。次の歌は「あくしゅでこんにちは」で，てくてく歩いていくという歌詞のつながり歌だ。最後が「手のひらを太陽に」の歌を歌った。T先生はギターを持ち出して弾いた。この曲は幼児には発声が難しそうだった。T先生は，「生きているんだ」の発音について注意を促した。

次に今日のリーダーの女児が一人で前に行って，バッジを受け取ってつける。子どもに聞いたところ，リーダーは毎日一人が担当する。年中児の時にはリーダーはいなかったそうだ。そして，「先生，おはようございます。皆さんおはようございます」と全員で挨拶をした。

T先生は今日の日付と曜日の確認をした。20日は難しい言い方で何と言うかと聞くと，一人の男児が「はつか」と答えることができた。日付の難しい読み方（ふつか，みっか，よっか，いつか，むいか，なのか，よおか，ここのか）も教えているようだ。続いて，T先生は，虫取り網を出して，虫の取り方，取った後に網がねじれるようにすると，虫が逃げないなどの使い方について動きを伴わせて説明した。そして，虫取り網の柄を勝手に伸ばさないなどの注意をした。そして，最後に出席を取った。その時，子どもは好きなポーズをして良いようで，「カメハメハ」と言う子もおれば，猫のようにT先生の足元にじゃれつく女児，椅子に後ろ向きに座って降りる男児など，実にユニークだった。

A幼稚園の特徴の一つに上記のような保育者と子どもの間のユーモアや笑いを交えたコミュニケーションがあることが挙げられる。年長児たちはすでにユーモアによって人を楽しませる術を習得していた。それは保育者であるT先生自身が日頃からユーモアを交えた会話を子どもたちとすることを楽しんでいることが一因となっているようだ。コロナ禍の中，子どもたちと笑いあえる保育が実践できていること自体意味があると考えられる。それは子どもたちが保育者を信頼し，幼稚園が子どもたちにとって安心できる居場所になっていることの証である。

(3) 当番

筆者は 2020 年 7 月 20 日の朝の会に続いて年長児ゆり組の当番活動を観察した。この日のゆり組の担当は鶏の世話と鶏小屋の掃除であった。鶏の餌用の野菜は，子どもたちが家から持って来ることになっている。しかしあいにくこの日は野菜の準備ができていなかった。T 先生は子どもたちを連れて，園庭のクローバーをむしらせて，野菜の代わりにした。鶏小屋を開けて，子どもたちは T 先生と掃除をした。鶏の羽や糞などのゴミを箒とちりとりで掃除した。鶏用の餌の上に草をのせて，水と一緒に小屋に入れる。ゴミは園庭のコンポストに入れる。採れた卵 3 個はさくら組にあげるそうだ。以前，筆者は，T 先生が設定保育で子どもたちに鶏の絵を描かせているところを観察したことがあった。鶏には一羽ずつ名前が付けられていて，子どもたちはそれぞれの性格も理解していた。鶏は小屋から出されて，子どもたちは自分の気に入っている鶏を絵に表現した。日頃から鶏を世話しているからこそ，その生態が正確に描かれていた。

雑巾かけ，箒ではく，鶏の世話，今では，家庭で行わなくなった労働を A 幼稚園では日常的に行っている。そのことによって，子どもたちは守られるだけではなく，自分たちも自治的に幼稚園生活を運営する一員であるという責任感と誇り，自信が育っているようだ。A 幼稚園の当番活動は，遊びと共に，人間形成にとって重要な役割を果たしている。

(4) 好きな遊び

9 時 30 分から 10 時 30 分まで好きな遊びに取り組む。A 幼稚園では「わくわくタイム I」と名づけている。この時間帯では，保育者が構成した環境の中で，子どもたちは何をして遊ぶか，誰とどこで遊ぶかを自由に決めて活動する。2020 年 7 月 20 日のゆり組の当番活動の後，T 先生と子どもたちの虫取りを観察した。

9 時 45 分，ゆり組の子どもたちとすみれ組の男児たちは虫取りに興じていた。隣の小学校のグラウンドまで入って虫取りをしている。セミ，トンボを捕獲しようと頑張っている。セミがせわしく鳴き，トンボが空中にたくさん舞っている。男児たちは，しきりに網を上げては，トンボを取ろうと悪戦苦闘していた。T 先生は鶏の世話の後，虫取りにずっと同伴した。アブラゼミをとった男児に対して，別の男児は，「逃した方がいいと思うよ。一週間しか命がない」と言った。セミに対する受け止め方も，子どもたち一人一人違っている。

T 先生は，セミ取りを積極的にサポートした。失敗しても，「おしい」と言って，決して否定しない。セミが取れるように子どもを抱っこして持ち上げるなど，一人一人が達成できるように援助した。T 先生はカメラを持っていて，セミが取れたら，子どもの記念写真を撮る。その時の子どもの笑顔は実に幸せそうだった。女児 2 名もずっと同伴した。一人の女児はセミの抜け殻を拾っていた。T 先生は，「抜け殻，いいね」と言った。女児は，網を欲しがったり，虫を取ろうとする様子はなかった。しかし，虫かごは持ちたがっていた。私が，一人の女児に「網を欲しくないの？」と聞くと，必要ないと言う返事が返ってきた。

T 先生は，虫を取りながら，自然科学の知識をも教えていた。「セミが出てきた，地面の土の様子」，「セミが脱皮に失敗して，蟻に食べられている様子」に注目させた。男児が，「虫かごの中で，セミがくっついている，結婚しとる」と言った。T 先生は，「仲良しになってるので，外したら，かわいそうだ」と答えた。園庭から，小学校の校庭，再び園庭を一周して，幼稚園の後ろの斜面へと，移動しながら虫取りをした。この日は猛暑で熱中症になりそうなくらいの暑さだった。加えて，保育者たちはコロナ感染対策のためにマスクを着用していたのでなおさら暑さが身に染みた。しかし，子どもたちと T 先生は気にすることなく，虫取りに興じていた。園庭の後ろの斜面のフェンスに T 先生が登って，樹木に網を伸ばすと，男児も後に続いてフェンスによじ登ろうとした。園庭から，「フェンスに登ってはいけません」と他の保育者が注意すると，T 先生は「見てますから」と答えた。T 先生は子どもたちに，できる限り虫取りの成功体験をさせるようにサポートした。男児たちは，T 先生を男性モデルとして，懸命に後に続いて，冒険をしているように見えた。子どもたちも T 先生もさらに虫取りをし続けるつもりだったが，10 時半となって片付けの時間になった。子どもたちは手洗いとうがいをして，部屋へ入った。

(5) 設定保育

毎日，10 時 30 分頃に片付けをして，制作，絵画，集団遊びなどの保育者が計画した設定保育が行われる。A 幼稚園では「きらきらタイム」と呼んでいる。2020 年 7 月 15 日（水）に年長児すみれ組の設定保育を観察した。担任の M 先生は

保育歴25年のベテランだ。

子どもたちは10時45分に教室に集まった。まず，全員で手遊び「キャベツの中から」をした。M先生がカミキリムシの話をすると，子どもたちの方からどんどんと発言をする。どこから声を出すとか，実によく意見を言う。

M先生は，コロナ禍による休園によって，5月の母の日，6月の父の日のプレゼントを作れなかった。このため，7月にお家の人へのプレゼントを作ることにする，と伝えた。M先生は，何を制作するかをすでに考えていた。牛乳パックの開いたものの外側に糊で模様の紙を貼って，ハサミで切って，組み合わせ，ホッチキスで止めて，かごを作ることを提示する。糊をつけたら乾かす必要があるので，今日は模様の紙を貼り付ける作業をすることになる。子どもたちは実に機敏に動く。道具箱から糊とハサミをとって，一列に並んで，牛乳パックの開いたものを受け取って席に着く。テーブルには模様の紙の入った箱が置かれる。子どもたちは自分なりにどんどん作業を進める。M先生は途中で，模様の紙を小さく切る子，大きく切る子の作品を紹介したり，斜めに貼っている子どもの作品を見て，「面白いね」と評価する。子どもたちは特に友達の作品に影響を受けることもなく，思い思いに作っていた。牛乳パックの開いたもの，模様のある紙，という限られた材料でも，一人一人の個性が出てくることが興味深かった。作業が早くすんだ子どもは，自分の席でスケッチブックに絵を描いて待っていた。終始，M先生が注意したり，指示する場面はなく，すべて子どもたちは活動の流れを理解して，自ら作業に取り組んでいた。11時5分くらいには，制作は終わっていった。M先生は，作品に名前を書いて，糊を乾かすために廊下に吊るした。

M先生は子どもたちからフルネームで呼ばれている。赴任してずっとだという。もう一人のY先生も下の名前が同じだからかもしれないと想像していた。A幼稚園では，子どもたちも，保育者同士も先生の名前をファーストネームで呼ぶことが多い。こういった点からも，保護者たちにはアットホームな幼稚園に映るのかもしれない。この日，M先生に4，5人の男児たちが決闘を申し出ていた。闘うための道具をペットボトルで作って，セロテープで頑丈にくっつけている。なぜか，M先生を敵に見立てていた。M先生は男児たちのファンタジーの世界に微笑ましく付き合いながらも，特に関与もされなかった。子どもたちとの関係が近く，親密でありながら，必要範囲を越えて子どもの遊びの世界に介入しない。

11時25分に遊戯室に移動して，じゃんけん列車を2回行った。最後まで勝った子どもをM先生は抱き上げて旋回させた。子どもたちはこれをしてもらうことを待望している。M先生は，次回は，ハンカチ落としゲームをしようと伝えた。他のクラスの邪魔にならないように，静かに教室に戻るように伝えると，子どもたちは忍者の忍び足になって退室していった。

(6) 弁当

引き続き，2020年7月15日に年長児すみれ組の弁当の時間を観察した。手洗い，うがいと消毒をして，机を当番が拭くといよいよ弁当の時間だ。11時40分，当番が前に出て，弁当の準備をするように告げる。M先生がオルガンでシューベルトの子守唄のメロディーを弾くと，子どもたちは机に頭を伏せて静かに眠るポーズをとる。しばらくして，M先生がオルガンで「蝶々」のメロディーを弾きながら，「起きましょう，起きましょう，すみれ組のお友達」と歌うと，子どもたちは「はーい」と言って目を覚ます。そして「おべんとう」の歌を歌ってから，手を合わせて，「いただきます」をする。リーダーは，「今日のごちそうさまは，3です」と伝える。昼食時間を25分間にしているようだ。そして，食事を始める。

2021年3月11日（木）12時から筆者は年長児ゆり組の卒園前，最後の弁当の時間を観察した。当番の子どもたちが机を雑巾で拭いて回っていた。T先生のピアノに合わせて「おべんとう」の歌を歌ってから，リーダーの子どもが前に出て，「いただきます」をして食べ始める。明日から午前中保育だ。子どもたちの弁当にはメッセージが添えられていたり，好物のおかずが入っていたり，ゼリーがいつもだったら1つなのが4つ入っていたり，当時人気のあった『鬼滅の刃』のヒロイン「ねずこ」のおにぎりが入っていたりしていた。一人の男児が弁当に添えられている母親からのメッセージを読んで泣いている。男児は涙をポロポロ流して，15分くらい弁当を開かないで，自分の席で静かに声を出さないで泣いていた。最後はT先生が近づいていって促したことで，ゆっくりと箸と弁当を開いて食べだした。男児への母親からのメッセージには「いつも おいしいといって おべんとうを たべてくれて ありがとう」と書かれてあった。

この日の弁当の時間は実に賑やかだった。喋

る，後ろを向く，歩く，遊ぶ。子どもたちは今日が最後の弁当の時間だということを実感して，友達と少しでも今を共有したかったのだろう。T 先生はあえて注意をしなかった。そして全員が食べだしたのを見てから，T 先生は職員室に弁当を取りに行って，ピアノの上で素早く食べ終わった。コロナ禍の中，保育者は子どもたちと同じテーブルに着いて食事を共にすることができなかった。弁当の時間はいつもなら早く終わった子どもからごちそうさまをしているようだが，この日は全員でごちそうさまをすることになっていた。早く終わった子どもは絵本を読んで待っていた。最後の 5 分をモグモグタイムにして食べることに集中させている。さまざまな点において，小学校接続を意識している。子どもたちは昨日書いた弁当を作ってくれる人（ほとんどが母親宛であったと推察される）への手紙を弁当の前に置いている。そして弁当を包む布に挟むように T 先生は言った。リーダーの子どもが前へ出て，全員で「ごちそうさま」をした。

後述する保護者へのインタビューから，幼稚園生活 2 年間の弁当作りは，親子関係に影響を及ぼしていることが分かった。最後の弁当の日に，母親からのメッセージを読んで泣いていた男児の姿がそのことを物語っている。

(7) チャレンジタイム（年長児）

13 時から再び，好きな遊び，いわゆる「わくわくタイム II」が行われる。そして，年長児は引き続き「チャレンジタイム」があって，その時間に，自分が上達したい活動に取り組む。2021 年 3 月 11 日 13 時 35 分から 55 分までチャレンジタイムを観察した。

すみれ組では，M 先生が子どもたちに何がしたいかと聞いていた。子どもたちは「縄跳び」と答えた。子どもたちは自分で選んで縄跳びをしたり，竹馬をしていた。保育室では M 先生がピアノを弾いて，じゃんけん列車をしていた。ゆり組は独楽回しだ。保育室に独楽用の台を置いて，T 先生と男児たちが独楽回しをしていた。廊下では 3 名の女児が独楽回しをしていた。女児たちは保育室の中で男児と一緒に台で独楽を回そうとしない。私が「台でさせてもらったら？」と言ったが，笑みを浮かべるだけで，言い出す気はないようだ。3 人の女児は廊下で巧みに独楽を回していた。そして回っている独楽の色の変化を観察していた。色の変化をじっくり見て，男児達のように勝負をするつもりはなかった。

降園の時は，保護者たちは隣の小学校に駐車して幼稚園の園庭やテラスで子どもたちを迎える。その時に，子どもたちのチャレンジタイムの様子を見たり，担任と話をする。A 幼稚園では月，火，木，金は 14 時から 15 時まで園庭開放をしている。園庭開放の日には，子どもたちは保護者が見守る中，引き続き幼稚園に残って遊んでいる。子どもたち，保護者，保育者が集い合うひとときである。

以上のように，A 幼稚園の保育実践の特徴は，一日のスケジュールが明確に決まっていることにある。朝の集まりは 9 時にほぼ正確に始まって，その後の日課も決まっている。当番活動が終わると，好きな遊びの時間がたっぷりとられている。保育者たちは環境構成や援助に徹しており，子どもの活動への目立った介入をしない。しかし，T 先生の実践のように，その時にしか体験できない活動については，好きな遊びの時間に保育者が手ほどきをしながらたっぷりと経験させている。とりわけ歴代の園長たちは独楽回しなど，自分の持ち味を発揮して好きな遊びの時間に子どもたちに技を伝授していた。続いて，設定保育を毎日，一定時間行っているのも A 幼稚園の特徴であろう。保育者の計画した活動に全員で取り組むことで，教育的ねらいを達成することを大切にしている。年長組になると，小学校への接続をも意識した活動を取り入れている。弁当の時間の手順も決まっている。近年，日本の保育施設ではプロジェクト活動や異年齢保育，バイキング形式の給食などを実施することも特別なことではなくなっている。このような中にあって，A 幼稚園の保育は時代の変化にあまり影響を受けることなく，伝統的なスタイルを守っていると捉えられる。

V．保護者インタビュー

2022 年 7 月 5 日（火）14 時から 14 時 45 分まで A 幼稚園の空き教室で，母親 3 名に半構造化インタビューを行った。当時は園庭開放の日で，子どもたちは，学生が企画したイベントに参加して遊んでいた。母親たちには事前に園長を通して研究協力について依頼し，承諾をいただいていた。さらにインタビュー前に筆者からインタビューの目的と個人情報の保護等の説明を行った。インタビュイーは A，B，C とする。

(1) A 幼稚園に決めた理由

A の上の子どもも A 幼稚園に通っていた。上の子どもの時はまだ幼児教育無償化にはなってい

なかったので，保育料が安かったことが入園を決めた理由だった。現在は無償化となっているがA幼稚園に決めた。その理由を，入園のために並ぶ必要がなく，手続きが簡単で，制服もないことが気に入っていると説明した。そして，後で分かるが，A自身のA幼稚園への信頼が厚い。

Bの上の子どもは現在小学校4年生で，A幼稚園卒園児だ。そしてB自身も卒園児だ。Bは現在の園長のY先生に担任してもらったそうだ。Bは，自分の子どももA幼稚園に行かせたかったと語った。私立幼稚園ではカリキュラムで色々な教室があるが，Bは幼児教育では必要ないとはっきりと言った。Bが幼稚園児だった当時と今とでA幼稚園の基本的方針は変わっていない。A幼稚園はのびのびして，子どもの性格にあった保育をしてくれるという。自身も卒園児であったBのA幼稚園への信頼は，AとCなど他の母親に対しても波及効果を与え，安心につながると考えられる。

Cの小学校3年生の子どももA幼稚園に通っていた。A幼稚園は弁当があって，送迎が必要だが，それゆえに，今しかできない親子の関わりが深くなると語った。大変だけど，小学校になると給食があって，弁当を作る必要がなくなりかえって寂しいそうだ。

(2) A幼稚園に満足しているか

① 保育者のこと

Bはベテランの先生が多いことが気に入っている。今年度の入園当初，子どもはずっと泣いていた。担任は親身に接してくれるという。毎日，今日はこんなことがあったと教えてくれるので安心だ。

Aは先生の学びがすごいと開口一番に言った。今，A幼稚園は食育がテーマで，毎月の食材のチャレンジデーがある。先生は子どもたちの弁当の中に新しい野菜を見つけたら絵を描いて，教室に貼っているそうだ。この取り組みによって，子どもが野菜に関心を持つようになったそうだ。子どもは元々，茄子が嫌いだった。ところが，幼稚園で茄子を育てて，担任がクッキングをして，みんなと一緒に食べると美味しくて，好きになったそうだ。Aは「ありがたい」と言った。A幼稚園の先生たちは勉強していて，進化していると表現した。より子どもたちのためを思って勉強している。「先生たちはすごいと思う」と言った。

Cは預けたら安心で，不安がないと表現した。一人一人見てくれて，一人一人に合わせた対応をしてくれる。

② カリキュラムのこと

Aは，幼少期は「遊んで学ぶ」と言った。「遊びの中で学ぶ」とも表現した。英語などは小学校で学べると続けた。Aは自信を持って答えた。筆者はAのこの発言が幼児教育のことを知っていて，専門的だったので驚いた。どこで学んだのか聞いた。理由はT先生だった。T先生は2週間に一回，A4サイズのクラス便りの裏に「T先生のひとりごと」を書く。その中で，「幼稚園教育要領」に基づく幼稚園教育の基本や遊びの大切さなどを解説する。Aによると，それを読むことで勉強になるという。「時々，びっしりと書かれていて」と，それを読む時の自らの様子を仕草で表現してくれた。

CはA幼稚園ではほとんど遊びだと言った。「遊んで，遊んで，遊んでだ」と微笑ましい表情をしながら表現した。C自身はインドア派で，虫が苦手だそうだ。A幼稚園でやってもらえて楽だと思っている。子どもは母親が虫嫌いなので，最初触れなかったという。今では子どもは虫も触れるようになった。虫が嫌いだとキャンプにも行けない。小学生になったときに，虫嫌いだと困ると思うと語った。

Bは今の子どもたちは外で遊べない子どもが多い。公園へ行っても友達がいない。鉄棒もできない子どもが多い。A幼稚園では遊びの中に多くのことを取り入れて，日頃の成果を行事で発揮できる。

母親たちの発言は，保育者たちが発信する幼児教育の理論「遊びの中で学ぶ」で裏打ちされていた。インタビューの中で話題になった，「T先生のひとりごと」の2021年度版をT先生に見せていただいた。まず第1号では自己紹介，第2号で「幼稚園教育要領」の紹介と遊びの教育的意味について解説している。第3号は基本的生活習慣，第4号は飼育しているダンゴムシとその生態について，第5号では好き嫌いと対処法について，第6号ではピーマンレシピの紹介とA幼稚園の園内研究テーマ「食育」について，第7号はT先生の好物のカレーパンについて，第8号は夏休み中の幼稚園教員の過ごし方と研修会参加，第9号はA幼稚園に生息する生き物について，第10号は運動会の裏話，第11号は幼児教育における見通しの持たせ方，第12号は保育実践を撮影した

写真販売，第 13 号はお遊戯会の裏話，第 14 号は教員養成大学への協力について，第 15 号は縄遊び，第 16 号は幼児教育とファンタジーの世界であった。保育歴 20 年の T 先生は毎年欠かさず，16 号に及ぶ「T 先生のひとりごと」を発行している。

A 幼稚園では，T 先生以外の保育者たちも創意工夫したクラス便りを発行している。保護者インタビューを通して，保育者たちによる実践の言語化及び可視化が効果的に機能していることが明らかとなった。このような取り組みによって，保護者たちは，A 幼稚園の保育を信頼し，園を選んだことへの自信につながっていると捉えられる。

③ 送迎，弁当について

A は知り合いの母親から聞いたそうだが，園バスは時間通りに停留する場所まで行かなければならない。乗り遅れると，結局幼稚園まで送らないといけなくなる。つまり，園バスの来る時間が決まっていて，選べない。遅い時間だと園バス乗車が 10 時になってしまい，幼稚園での朝の遊ぶ時間が短くなる。A 幼稚園へは送迎しなければならないが，そのことでかえって親子が朝の時間をゆっくりできる。自分たちのペースで朝の時間が過ごせるからだ。A は弁当を作るのが好きだそうだ。「パパの分も作るし，朝ごはんも一緒に作って，上の子どもにも食べさせる」と語った。さらに，A は「子どもと一緒にがんばったと思える」と語った。「いい思い出がたくさんできた」と表現した。

B は迎えに来たときに子どもの遊びを見ることができて，他の母親と関われると言った。幼稚園での毎日の様子を見ることができる。B は，「ここですべてが見える」と表現した。小学生の子どもがたまに弁当を作ってほしいと言うそうだ。そんな時，自分が子どもの幼稚園時代にやってきたことに意味があったことがわかって，感動するという。

送迎，弁当作り，母親たちはそのことで，子どもと一緒に頑張ったという連帯感を感じている。筆者は，母親たちの発言から，T 先生のクラスの男児が最後の弁当の日に，母親からのメッセージを読んで，泣いていたエピソードを思い出した。インタビューをした母親たちは，毎日の送迎や弁当など，頑張らないといけないことは，大変だけど，親子の関係を育むと受け止めていた。

(3) 新たに取り組んでほしいこと

A にはご飯を作ることが苦手な友達がいる。この A の発言は，完全給食を望む人が世間には多いことを示している。保育時間については，15 時，あるいは 16 時まで延長できたら，A 幼稚園に子どもを入れたい人は多いと述べた。

ここで筆者の方から，3 歳児保育実施について考えを聞いてみた。B は行かせたい人は多いと答えた。一般的に，4 歳児まで入園を待てない人が多いという。

さらに，筆者は，A 幼稚園に 3 歳児保育があったなら，受けさせたかったかと聞いた。

B は，幼児期は短いとはっきりと言った。3 歳から幼稚園に通うと，親子のふれあいの時間がなくなる。大変だけど，一緒の時間を大事にしたい。その間に親子関係が築けていると語った。

C は 3 歳児クラスには入れなかったと思うと答えた。可愛い年頃なので，家に置いておきたい。その分，親子のつながりが大切だ。あえて 2 年保育でいいと思っていると答えた。

A は A 幼稚園で実施している未就園児対象の活動で十分だったと答えた。2 年保育でいいと考えている。A は，人生長いので，100 年の中の 3 年は短い。親子で関わる時間は短いと続けた。小学生になると，幼稚園時代とまったく違う学校との関係になるようだ。A は，子どもが通う小学校の担任と未だに話したことがないそうだ。小学校からは A 幼稚園のクラス便りのような親密で詳細な情報は届かないようだ。

さらに，B は他の家庭では，子どもを人気のある私立幼稚園に行かせるために，未就園児クラスに入れて，1 歳からバタバタしているケースがあることを指摘した。B はこのような状況が嫌だったという。ゆっくりと幼児期を過ごさせたいと語った。

最後に筆者は A 幼稚園の公立幼稚園としての展望について聞いてみた。

C は A 幼稚園には市と小学校との連携があると言った。C の子どもは，隣の小学校で給食を食べたりする体験を楽しみにしている。

B はプールなどで小学校へ行けることを良い取り組みであると受け止めている。4 歳児から小学校で遊べるので，小学校への不安が減るだろうと続けた。

A 幼稚園は小学校に隣接している。そのため年間通して，小学校との交流が行われている。例えば，小学校プール訪問，年に 3 回の給食体験，「学校公開の日」等を利用した参観，アプローチ

カリキュラムの作成，職員同士の合同研修会などである。日常の保育においても，登園に対する考え方，明確に設定されている日課，当番活動，好きな遊びと設定保育の区別などに，幼小接続の意識が理解される。また，A 幼稚園の保育者たちのほとんどが小学校教諭免許状を持っているため，小学校との接続を理論的にも実践的にも意識した指導をすることができていると捉えられる。インタビューを通して，母親たちが，A 幼稚園の小学校教育への接続を意識した保育を評価し，公立幼稚園としての存在意義と捉えていることが明らかとなった。

C はもっと A 幼稚園について市がアピールしてほしいと言った。A 幼稚園のことが広報誌に載っていないという。したがって，A 幼稚園のことを知らない若い母親がいるそうだ。B は園児を増やすことが大切だと言った。C は表面的なことしか人は見ないので，中身について知らせることが大切だと言った。例えば前園長の I 先生は送迎の意味について保護者に話されたという。坂道の前で降ろすことは，小学校接続の練習であることを I 先生は説明された。弁当については，食べることができなかった食材を食べられるようになった時などに，親子で成長を感じる機会になる。C は，A 幼稚園の良さを伝えてほしいと言った。月に一回開催している未就園児も参加できる「Go! Go! ようちえん」や地域に開かれた「オープンガーデン」のような体験会の時に，未就園児の親に A 幼稚園の保育の意味を話すことが大切だと言った。また，市役所で転入届けを出す時に，幼稚園の情報を市が提供することも必要だ。コロナ禍で近所づきあいがないので大切であると語った。そして，広報誌の中で A 幼稚園の情報を伝えることが必要だ。

母親たちの発言は筆者が想定していたものと部分的に違っていた。インタビュー前，筆者は，母親たちが 3 歳児保育は必要と答えるだろうと予想していた。ところが，A，B，C 全員が，親子の関係を 3 歳児までは大切にしたいので，自分たちにとっては必要ないと言った。しかし同時に，一般的にはニーズがあることをも認めていた。ところでインタビュイーの A は専業主婦で，B と C はパートで働いている。B と C は，A 幼稚園の保育時間に合わせて仕事のシフトを組んでいるそうだ。そして母親たちは，A 幼稚園の弁当持参，送迎が親子関係を育むものと受け止めていた。

母親たちは幼児教育の基本についてきちんと理解していることがインタビューの中で明らかとなった。A はその理由として，T 先生が毎月発行する「T 先生のひとりごと」を挙げた。A 幼稚園では，定期的に，クラス担任，及び園長が保護者に向けてクラス便りや園便りを発行している。A 幼稚園の玄関先にはバックナンバーが状差しに入れられて，誰でも手に取れるようになっている。さらに，A 幼稚園の廊下には様々な活動や行事の写真付きのドキュメンテーションが所狭しと掲示されている。A 幼稚園の保育が誰にでも分かるように可視化されていることもまた，保護者の幼児教育理解と保育者への信頼につながっていると考える。

A 幼稚園の展望に関わって，母親たちは更なるアピールの必要性に言及した。A 幼稚園自身も外部に対して幼稚園の保育の意味をさらに発信することが必要だ。そして何よりも市が広報誌等を通じて，公立幼稚園の情報を市民に伝える役割を果たすことが求められている。

Ⅵ．保護者アンケート

2022 年 7 月 5 日に A 幼稚園の保護者対象に無記名のアンケート調査を行った。アンケート用紙は担任に配布と回収を依頼した。年中組は 16 名中 8 名が回答，年長組は 19 名中 17 名から回答を得た。回答者は年長組の父親，祖母の各 1 名以外は全員母親であった。保護者からの自由記述を以下の通り示す。

(1) A 幼稚園に入園を決めた理由

【年中組】

・お兄ちゃんが行っている幼稚園がいいと本人が言ったから。

・兄弟が通っていて，とてもアットホームな楽しい園だから。

・上の子が通っていたから。

・兄もこの園でお世話になり，いろいろな面が育っていて，のびのびと成長を感じて，楽しい毎日いやがらずに通っていたので，またお世話になりました。

・上の子が入園して，良い園だと知っていたので入園しました。

・兄も通っていたので。

・上の子が通っていたから。

・姉が通っていたため。

入園して 3 ヶ月経過しており，回答した保護者

たちは全員，子どもの入園の理由としてきょうだいが通っていたことを挙げた。

【年長組】
・お兄ちゃんが A 幼稚園に行っていてとてもよかったから。のびのびしている所。
・3 学年年上の兄も A 幼稚園に卒園までの 2 年間通ったが，満足だったので，弟も悩むことなく，A 幼稚園に入園させた。兄を入園させた理由は，入園手続きが簡単なこと，保育料が安価であること，歴史があること等である。
・兄が通っていた。
・自分がやりたいことを自由にできるので。
・少人数で素朴なところがいいと思いました。
・入園する数年前に園の様子を知ることができ，子どもたちがのびのびと楽しく過ごして，自分の子どもにもそのような所で成長してほしかった為。
・子どもが小さい間は，できるだけ一緒にいたかった。他の幼稚園では年少から（もっと早いところは年少小から）入園させないと，入れないと聞き，年中から始められるこちらの園に決めました。
・未就園児の時に子どもの広場や Go! Go! ようちえんに参加させてもらって，園の取り組みや園児の活発さを感じ決めました。
・アットホームな雰囲気，少人数で手厚い保育，遊びを中心とした子どもの成長を支援する立場としての保育者の視点。発達に合わせた遊びの場の設定をしている等です。
・アットホームだから!!! 何より園庭も広く子どももものびのびできるのがいいです!!
・自宅に近い，卒園児の保護者からの評判が良かった。
・幼稚園なのに入園料や制服代がかからず，月々の雑費代も少ない。行事もたくさんあり楽しそう。見学に行ったとき，先生がやさしく対応してくれた。
・ふんいきが好きだから。先生が良いから。
・よさそうだったから。
・初期費用が安い。
・市役所の方に勧められて。

年中児の保護者たちと同じように，きょうだいが通っていたことを理由に挙げるケースもある一方で，年長児の保護者たちは A 幼稚園の保育方針を第一の理由としてあげていることが特徴である。さらに費用面のことを理由に挙げていることも興味深い。幼児教育無償化制度の中でも，制服や給食導入等で家庭の経済的負担は決して軽くはないことが推察される。また，小規模でアットホームで，のびのびと自由な保育を理由に挙げていることからは，現代社会が喪失している子どもの育ちにとって大切なことを，幼稚園で体験させたいという願いが理解できる。年長児の保護者たちの幼稚園理解は，子どもの入園から 1 年の経過の中で深まっていることが回答から推察できる。

(2) A 幼稚園に満足しているか，その理由は

回答者は年中組，年長組共に「満足している」という回答だった。自由記述を以下に示すことにする。

【年中組】
・入園してから，日々子どもの成長していくのが感じられるから。
・人数が少ない分，先生の目が行き届いている。たくさん遊べて，子どもが楽しく登園している。
・のびのびとした環境で本人も過ごせて，楽しいと言って登園しています。
・遊びが中心で子どもはすごく毎日楽しそうなので。
・幼稚園での楽しい話を毎日聞かせてくれたり，帰りの車中で幼稚園で教えてもらった歌を楽しそうに歌っているので。
・人数が少ない分，一人一人を大事にしてくれるのがすごく伝わってきます。

年中児の保護者たちは共通して，入園後の子どもたちが喜んで登園している姿，そして成長している様子を見ることによって満足を感じている。幼稚園で教わった歌を帰りの車の中で歌っているエピソードが子どもの充実した生活を表現している。また，「人数が少ない分，一人一人を大事にしてくれるのがすごく伝わってきます」という回答からは，A 幼稚園の小規模化が保育の質を低下させるのではなく，一人一人のニーズに合った援助に繋いでいることが明らかとなった。

【年長組】
・子どもが楽しく通っている。先生たちが皆すばらしい。
・ルールなど子ども達に絵や写真を使ってわかりやすく楽しく指導されているので子どもの成長を実感できる。どの先生もしっかり子ども一人一人をみていて安心してあずけられる。なにより毎日

楽しく通っていて，「ずっと幼稚園に行きたい」と言っている。
・孫が幼稚園に行くのを楽しみにしている。これ以上の喜びはありません。先生もいい方ばかりで安心しておまかせできます。
・毎日，子どもが園に行くことを楽しみにしている為。たくさんの行事を入れて頂き，子どもが経験し学んでいる為。
・先生方がみなさん大らかで，経験豊かな方たちなので，安心して子どもを預けられます。特に一人目の時は，心配なことも多く，いつも先生に相談していましたが，その度に明るく「大丈夫」と言っていただき，とても心が軽くなりました。
・先生との信頼関係がとれており，子どもが毎日楽しく登園してくれる。家では見られない面があるのも写真などで見れて，子どもの成長を感じる日々です。
・無理強いで勉強させるのではなく，遊びの中で自立させて学ばせている。兄も小学校に入るまでひらがなも書けなかったが，今（小学３年生）では何の心配もなく漢字を書けており，幼稚園時のおかげだと思うから。
・毎日，先生と話せて園での様子を知ることができる。
・遊びを通してたくさん学んでほしい，というお言葉通りたくさんのことを体験させてくださるから。
・子どもが楽しそう。一度も行きたくないと言ったことがない。
・先生もお母さん方もいい人ばかりです‼
・子どもが幼稚園へ登園するのを楽しみにしている。本当に楽しそうにしている。良い先生ばかりなので安心して預けられる。
・３つほど保育園をかわりましたが，年齢のせいもあるのか，A 幼稚園に行きだしてから，人見知りがなくなった。また，朝をいやがることなく行くようになり，いろいろ学んできて成長しているのがわかる。
・ベテランの先生方のもと，子どもはのびのびと主体的に遊びを通してたくさんのことを学んでいます。
・子どもが大切にされていると感じます。

年長児の保護者たちも子どもが喜んで登園する姿，成長している姿を満足の理由に挙げている一方，年中児のケースに比べて，一段と保育方針や保育者たちへの信頼について詳しく記述していることが特徴だ。回答から，保育者たちが毎日の写真やクラス便りによって，保育の出来事や子どもたちの成長をわかりやすく可視化していることも保護者たちの幼児教育理解につながっていることが理解できる。保育者の専門性に対するリスペクトが年長児の保護者からの回答では際立っていた。

⑶ A 幼稚園に今後あらたに取り組んでほしいことはあるか

【年中組】
・年少クラス（３才）を増やしてほしい。（週１など）そうすると子育てでちょっと悩んでいる親子さんが気持ちも楽になるのでは？
・年少小があったらもっと入園する人が増えそう。あずかりもあれば，仕事している人達はすごく助かります。
・延長保育ができるようになるとうれしいです。仕事しながらあずけられる。

年中組の保護者３名が上述した通り，３歳児保育と延長保育を要望としてあげている。年中組の保護者たちは，子どもの入園の理由として共通して，上の子どもが通っていたことを挙げた。しかし，その背景には，A 幼稚園に通えるように仕事を制限するなどの努力が課されていると推察される。

【年長組】
・３年保育。
・子どもにとっても，親にとっても，大好きな，とても大切な園なので，児童数が減少しない取り組みを行ってほしいです。（存続させてほしい）よく聞く声としては，３年保育を望む声が多いと思います。私は働いているので，長期休暇に預かり保育をしていただけるととても助かります。
・朝のあずかりがもう少し早い時間からだと助かります。8時からとか。
・年長，年中，年少３クラスの実現‼
・体操教室などを週１でもいいからしてほしい。
・ない。今でも充分充実していると思います。
・ない。満足しています。
・ない。近年，コロナで行事も制限のある中，いろいろと楽しめるように工夫していただいていると思います。また感染者が増えているようなので，新たな取り組みはコロナが落ち着いてからかと思います。

年長組の保護者たちもまた，3歳児保育と預かり保育をあげている。年中組の保護者と同じように，A幼稚園に子どもを通わせるために，就労形態において努力していることが推察される。ここで注目すべきは，保護者たちが3歳児保育を自らの都合のためだけでなく，A幼稚園の存続の観点からも要望していることである。A幼稚園の保護者たちはきょうだい児をA幼稚園に入園させるケースが多い。保護者たちのA幼稚園に対する信頼が厚いことの証である。このような信頼感によって，保護者たちはA幼稚園の存続を願い，その方策として3歳児保育を要望していることに注目されなければならない。保護者一名はA幼稚園に満足しながらも，体操教室などを週一回でも開いてほしいと記述している。遊びの中で学んでいると理解しながらも，このような思いを抱く保護者がいることをどのように受け止めていくかも問われている。

Ⅶ．総合考察と今後の展望

(1) Kindergartenの意味の再考

A幼稚園でインタビューを行った母親たちは，幼児教育にとって大切なこと・よきものを，幼児時代をゆっくりと過ごすこと，親子の時間を大切にすること，親子関係を築くことと理解していた。それは，めまぐるしく忙しくなっている現代社会において，忘れがちな価値と言えよう。世界で初めての幼稚園の創設者フレーベルは，家庭を回復させるために幼稚園を作り，親子関係を育てるために保育者を養成した[14]。この幼稚園の本来の意味が今，見失われがちである。預かり保育という表現に象徴されているように，保育をサービス化，商品化している傾向がある。3歳児保育は時代の流れの中で求められ，子どもの発達にとっても，意味ある取り組みである。しかし同時に，母親たちが語ったことの意味を理解することをも求められる。しかしここで留意すべきは，3名のインタビュイー全員が母親で，1名は専業主婦，残りの2名は幼稚園の保育時間に合わせてパートで勤務しているという点だ。3名ともに幼稚園に子どもを通わせることを優先して，自分たちの仕事は二の次にしている。保護者アンケートの回答者も，年長児クラスに父親と祖母が1名ずついただけで，残りはすべて母親が回答していた。このことより，A幼稚園の保育文化を支えてきたのは母親たちであることがあらためて理解できる。つまり，そこには日本における母親による子育てという伝統が背景にあることを忘れてはならない。現代の家庭や母親たちの置かれた状況に配慮した3歳児保育と保育時間の延長は，A幼稚園の保護者からの要望として重く受け止められねばならない。

(2) 幼児教育について学ぶところ

母親へのインタビュー及び保護者アンケートによって，A幼稚園に子どもの入園を決めたのは，上の子どもが通っていたから，という理由が抜きん出ていることが明らかになった。そして，子どもが今日教えてもらった歌を車中で歌ったりして楽しく幼稚園に通う姿や成長する姿を，幼児教育の理論に裏打ちさせながら保護者たちはその意味を理解していた。そこには，幼児教育の基本について理解できるように，写真や言葉でわかりやすく伝えている保育者たちの努力がある。保護者たちは，子どもたちがのびのびと遊び，色々な経験を積むことに意味があると理解していた。幼稚園とは子どもの保育とともに，大人たちが幼児教育について学ぶ場所であるというのが，フレーベルが幼稚園に求めた機能であった[15]。A幼稚園は長年にわたって幼稚園教員養成のための協力実習園である。さらに地域の中学校の職場体験の場所として中学生を受け入れている。A幼稚園は保護者だけでなく，未来の保育者，若者たちが幼児教育について学ぶ場所となっている。今後さらに地域を巻き込むことによって，A幼稚園が幼児教育でつながり合い・育ちあう共同体に発展する可能性を孕んでいると言えよう。

(3) 保育文化の継承と同僚性

A幼稚園の保育者たちは全員保育歴20年以上のベテランである。保護者たちは保育者の経験年数の長さに対しても高く評価していた。保育者たちの勤務年数が長いことは，園の保育文化の継承が可能となる大切な条件である。しかし，それは保育者間の関係性が構築されている限りの話である。筆者が行った保育者インタビューでは以下のような発言があった。

保育者A「職員間では，良さを出してもらいながら，苦手なことを互いに補い合っている。それぞれが得意なことを頑張ってもらっている。」

保育者B「互いに教育観，保育観，発達観，見方を共有している。園長はいつも幼稚園がアットホームになることを大切にされている。アットホームという言葉は職員室にもつながっている。」

保育者C「人間関係がとてもいい。上司は全体

やバランスを受け止め，担任は上司の意向を察している。みんなで同じ方向へ持っていこうとしている。それぞれの個性を受け止め，バランスが取れている。」

保育者D「職員集団みんなで子どものことを見ている。」

筆者はA幼稚園の歴代の園長たちとこれまで機会あるごとに話をした経験がある。彼らは皆，元小学校校長出身者であった。その際，園長たちは共通して，A幼稚園で，幼児教育の素晴らしさを知り，保育者たちの指導や援助のあり方を尊敬し大いに評価していると語った。園長たちは皆，「A幼稚園の先生たちはすごい」と表現した。筆者には，園長たちの幼児教育に対する謙虚な姿勢が印象的であった。園長たちは保育について基本的に口出しをすることなく，保育者を支援することに徹していた。コロナ禍になる前は，職員室横の小さな和室の座卓を囲んで30分ばかりお茶を飲んで情報交換をしていたそうだ。職員集団の中で互いに尊重し合い，A幼稚園の保育文化を共有し，継承していることがアットホームな雰囲気を生み出し，保護者の安心と信頼につながっていると推察される。

(4) 幼稚園文化の継承と変革―あらたな教育テーマへの挑戦

A幼稚園の課題については，前園長I先生へのインタビューの中で，次のように表現されていることが示唆を与えている。

「A幼稚園では行事も同じことをやっている。もっと今あることを見直して，行事を精選して，特色のある行事を作り出して行くことが大事だ。」

I先生の言説は前述した保育文化の継承とは対照的な保育の変革を意味している。I先生は在職中に幼稚園を地域に開くオープンガーデンを開催した。A幼稚園の教育の質が高くても，専門家でもない限り，発信しないと人は関心を持たないという思いからだったそうだ。I先生は，例えば定期的に14時から15時まで学生による保育や創作活動，保護者向けの講座などを開くことを構想していた。しかし，コロナ禍ゆえに，多くのことを実現できなかったと悔しく思っているようだった。I先生は，「A幼稚園が発信する場であり，若い人を育てる場になれないことはない」と言った。A幼稚園に大学生も来て，保育に参加することによって，若者の育ちにも貢献することができる。I先生は，このような発想を持って，幼稚園で何かしないといけないと語った。それこそがここの職員の責任でもある，と言った。インタビューの中で，母親CはI先生の取り組みを高く評価していた。そして，I先生と同様に，A幼稚園と市に発信する努力を要望していた。A幼稚園が保育文化の継承と変革のバランスをどのように取っていくかが今後の課題であろう。

筆者が行ったフィールドワークでは，虫取り，独楽回しのエピソードの中の女児の存在が気になった。彼女たちは活動に興味を示しながらも，多数派の男児たちとT先生の遊びの世界の中に入り込もうとはしなかった。彼女たちの選択の自由に任せるという考え方もあるだろうが，果たしてそれで良いのだろうか。というのは，A幼稚園の子どもたちの女性モデルは保育園の子どもたちに比べて伝統的なものに留まっていることが推察されるからである。実際，弁当を作るのも，降園時に迎えに来るのも圧倒的に母親が多い。子どもたちには幼稚園において，意識的にジェンダーにとらわれない，多様な価値観や生き方に出会う機会が提供されなければならない。また，A幼稚園には数年来にわたって外国につながりを持つ兄妹が在籍している。しかし特別に多文化を意識した保育は行っていない。A幼稚園はジェンダー，外国につながりを持つ子どもたちをめぐる異文化間教育など，未だ日本の幼児教育において遅れがちである分野に積極的に取り組むことも必要だ。そのためには世界的な幼児教育の動向をも見据えた広い視野による幼児教育理解が必要である。A幼稚園の保育者たちは教育と研究を公立幼稚園の使命として長年にわたって取り組んできた。この経験から培った研究力によってさらなる分野の開拓は可能であると考える。新たな研究分野を開拓し，地域の幼児教育界に発信する役割を担うことが，今，求められている。その鍵を握るのが，保育者の研究力である。教育と研究というこれまで構築してきた役割をさらに深化発展させていくことの中にこそ，A幼稚園の未来があると考える。これはA幼稚園の「公立」であることの存在意義でもある。

A幼稚園は日本の保育施設の中のほんの小さな一部分でしかない。しかし，筆者は本研究において，地域の小さなA幼稚園の中に，幼児教育の普遍的な原理，つまりよきものを見出すことができた。本来，幼稚園とは，一人一人の子どもが自らの創造的な本性を発揮して，遊びの中で生きるところであると共に，大人たちは幼児教育につ

いて学び，硬直した精神を若返らせ，回復させる場所であった。このことをフレーベルは―「いざや　われらの子らに生きようではないか」というモットーで表現した[16]。A 幼稚園にはこれら幼稚園のよきものが未だ絶えることなく息づいている。幼稚園の意味は，時代や国を越えて普遍的なものとして受け止められねばならない。それはまた，時の政治や社会状況，経済効率化によって侵されてはならない普遍的な価値そのものなのである。公立 A 幼稚園の子どもたちの姿，保育者の指導力と研究力，そして保護者たちの声をどのように捉えるのか，これは国や自治体，そして私たち全員に向けられた幼児教育に対する問いなのである。

謝辞　本研究では，A 幼稚園の教職員，保護者，そして子どもたちにご協力をいただいた。ここに感謝を表する。

付記　本研究は JSPS 科研費 19K02644 の助成を受けたものである。

註

1 文部省（編）（1979）『幼稚園教育百年史』，ひかりのくに，125。
2 同上，125-126。
3 藤井穂高，相良亜希，梨子千代美，石毛久美子（2009）『公立幼稚園の存在理由に関する一考察―地方公共団体の各種検討委員会報告書等を手がかりに―』東京学芸大学紀要総合教育科学系（第 60 集），437-449。
4 藤井穂高，広瀬義徳（報告者），伊藤良高（討論とまとめ），秋川陽一（企画者）（2009）「課題別セッション II『公立』であることの意義 ―公立幼稚園の存在理由とはなにか―」日本教育制度学会第 16 回大会，教育制度学研究，54-67。
5 同上，64。
6 同上。
7 前掲『幼稚園教育百年史』，317。
8 同上，318。
9 同上，313。
10 同上，318。
11 同上，320。
12 同上，371。
13 同上。
14 小原國芳・荘司雅子（監修）（1986）『フレーベル全集第 5 巻』，玉川大学出版部，158，及び 103。
15 同上，273。
16 フレーベル（1964）人間の教育（上）（荒井武），岩波書店，117-119。